

認知症カフェ開設から創設期(第1回から第3回)までの経過と課題 ー広島県福山市初の認知症カフェ「ガーデンカフェ」においてー



福山平成大学福祉健康学部福祉学科 中司登志美
社会福祉法人新市福祉会 鎌倉昌子, 信岡紀邦, 信高里恵

1. 研究の目的

大学と社会福祉法人が協力して、市内初の認知症カフェを開設するまでの経過と、初回から3回までの創設期をまとめた。ここから課題を明らかにし、今後の改善に向けての示唆を得ることを目的とする。

2. 倫理的配慮

参加者や参加スタッフ個人が特定されないように配慮する。

3. 結果

(1) 準備期(2014年6月～9月)

第15回大会のシンポジウム「認知症カフェ」に啓発されて、大学と社会福祉法人に所属する認知症ケア専門士2人が中心になって地元地域に「認知症カフェ」を開設する必要性を語りあった。そして、8月に大学からは教員1人と学生2人、社会福祉法人からは施設長2人、副施設長1人、職員2人が集合し、第1回運営委員会を開催した。そこでは、カフェの目的、名称、開催場所、日時、頻度、内容、参加費、対象者、広報方法、事務局、スタッフの呼びかけ、第1回開催までのスケジュールと役割分担が話し合われた。(毎月1回土曜)

開催場所は、社会福祉法人が同年4月に開設した障害者就労継続支援B型事業所レストランに決定した(食器、光熱費も含め使用料は無料)。

9月には第2回の運営委員会を開催し、初回カフェの運営について協議。ちらしを委員で分担して配付することにし、新聞社へも取材依頼した。

(2) 創設期(2014年10月～12月)

①第1回カフェ: 2014年10月11日(土) 13:00～15:00 **参加者15人、スタッフ22人、合計37人。**

学生手作りの名札に、全員が各自で名前を書いて胸に張り、座席指定のテーブルに着席。レストランのシェフによる手作りチーズケーキと飲み物(数種類が飲み放題)をサービス。**参加費は一人200円。スタッフも自己負担。** 歓談中心のカフェ。

②第2回カフェ: 2014年11月22日(土) 13:00～15:00 **参加者28人、スタッフ26人、合計54人。**

医師によるミニ講演会を実施。9～11月に新聞3社、地域新聞、FM等マスコミの取材がある。そのため参加者が急増し、カフェの雰囲気を変えた。落ち着かない雰囲気に影響されて、突然認知症の人が不安を訴え、帰宅される事態が生じた。無制限に参加希望者を募ったことを反省した。

③第3回カフェ: 2014年12月20日(土) 13:00～15:00 **参加者12人、スタッフ24人、合計36人。**

カフェに定員を設け、全員がゆったり座り、お茶



<最近の日程>	
12:00	ミーティング
12:30	開店準備
13:00	カフェ開店
～	
14:30	ミニ講演会・企画
15:00	閉店
	片づけ
15:15	ミーティング
16:00	終了



クリスマスコンサート



と会話が楽しめるようにした。季節行事として、スタッフが楽器を演奏するクリスマスコンサートを開催。全員で合唱も。以後、皆で最後に一曲歌を歌うことになった。テーブル毎握手をして別れる。

4. 考察

初回から、たくさんの参加者とスタッフが集まった。認知症の人と介護家族は勿論、地域も、年齢も、立場も制限せず、認知症に関心のある人に参加を呼び掛けた結果である。また、運営委員会にはその後更に4団体が加盟し、介護職を中心に、医師、看護師、社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員、学生がスタッフとして参加している。

実施を通して次のような課題が見えてきた。

(1) 参加者のニーズに応えることが基本

事前申込みを呼び掛けたが、当日突然参加の人も少なくなく、対応に戸惑った。個別相談の必要性や申込み時点で要望や介護状況等を尋ねることが参加者の満足度をあげることに気付いた。

(2) 事前事後のスタッフミーティングが不可欠

3回は事後スタッフミーティングのみ実施。しかし、有志だけの参加で、事務局でさえ全体が把握できずにいた。参加者の参加動機や要望を全員で共有して対応するべきと考え、4回目からは事前ミーティングを始めた。スタッフ全員で、情報の共有をし、運営を検討することは不可欠である。

(3) 小規模で落ち着くカフェ

第2回のカフェの失敗から、認知症カフェは小規模で、落ち着く場所にしなければならないと確認した。

(4) 運営費の捻出

運営費が参加費のみのため、スタッフからも参加費を徴収して経済的負担もかけている。その負担の軽減が必要だと考えている。